

定例研究会要旨

日時：平成 26 (2014) 年 1 月 15 日 18:45~20:15

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「中期チュルク語の接尾辞-niŋki について」

発表者：菅原 睦 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授 / 言語学, 中期チュルク語)

「... のもの」を意味する表現は、トルコ語では名詞・代名詞の属格に接尾辞-ki をつけることで構成される：hoca-nın-ki 先生のもの sen-in-ki 君のもの。

これに対してウズベク語では、属格接尾辞ではなく対格接尾辞と同形の-ni (一部の代名詞では-i) を伴う形に、対応する接尾辞-ki が付される：domla-ni-ki 先生のもの sen-i-ki 君のもの。従来の記述はこれらの例に見られる接尾辞-ni および-i を属格接尾辞-niŋ, -iŋ のヴァリエーションとして扱ってきた。興味深いことに、タタール語やキルギス語で同じ意味を表わす形式もやはり対格接尾辞を含んでいる。¹

タタール語 (対格-nĕ, -ĕ) : Äminev-nĕ-kĕ エミネフのもの min-ĕ-kĕ 私のもの

キルギス語 (対格-nI/-dI/-tI, -I) : atam-dĭ-qĭ 私の父のもの sen-i-ki 君のもの

(cf. 属格接尾辞 タタール語-nĕŋ, -ĕŋ; キルギス語-nIn/-dIn/-tIn, -In)

本発表では、これらの言語で指示詞に所有接尾辞が付される際に主格形ではなく対格形がベースとなることや、²古代チュルク語において人称代名詞・指示代名詞の対格形がさらなる接尾辞付加や後置詞を伴う際のベースとして用いられる³ことに着目し、接尾辞-ki⁴に先行する対格接尾辞もこれらと同じく形態的な要請によるものであると主張した。したがって「... のもの」にあたる表現が示す帰属の意味は、格接尾辞ではなく接尾辞-ki それ自体が担っていると考えるべきである。これはトルコ語のように接尾辞-ki が属格接尾辞に先行される場合でも同様である。⁵

以上の分析をふまえたうえで、中期チュルク語文献中における接尾辞-ki の用例を検討した。いわゆる前古典期チャガタイ語 (15 世紀前半) 以前の文献では、現代チュルク諸語と異なり

¹ 以下、大文字は母音調和によって交替する母音を示す。タタール語 ĕ = ĕi; キルギス語 I = i/ü/ü. なおカザフ語の対応する表現においては-ki に先行する接尾辞の母音は常に i であり、この点で母音調和による交替を示す対格接尾辞と異なる：bala-ni-ki 子供のもの (対格 bala-ni 子供を) olar-di-ki 彼らのもの (対格 olar-dĭ 彼らを)。

² ウズベク語とキルギス語では疑問詞の一部でも同じ現象が見られる。

³ 後置詞に先行する対格の例はキルギス語やカザフ語の代名詞でも見られる。

⁴ 以下この接尾辞を-ki で代表させて表記する。

⁵ トルコ語では、一部の後置詞に先行する人称代名詞・指示代名詞 (および疑問詞 kim 「誰」) は対格ではなく属格の形をとる。

属格+**-ki**が名詞を修飾する例のみが確認された。⁶

(1) **munuŋ-ki**⁷ turuğlağ Quz Ordu el-i

これ GEN-ki 居地 国-POSS3

「この者の居地はクズ・オールドゥ (=バラサゲン) の地」

(『クタドゥグ・ビリグ』韻文序)

(2) ä qamuğ maxluq **sän-iŋ-ki** qudrat-iŋ-niŋ burhan-i

汝 GEN-ki 全能-POSS2SG-GEN 明証-POSS3

「おお、すべての被造物が**そなたの**全能の明証である御方よ」

(ウイグル文字による頌詩)

(3) ayā ey ħusn bāg-iŋiŋ taðarw-i

おお 美 庭園-POSS3.GEN 雉-POSS3

laṭāfat jöybār-iŋiŋ-ki sarw-i

優美さ 小川-POSS3.GEN-ki 糸杉-POSS3

「おお美の庭園の雉よ、**優美さの小川の**糸杉よ」

(ユースフ・アミーリー『ダフナーマ』)

最も初期(12世紀?)の例であると考えられる(1)において、接尾辞**-ki**は帰属を表わす接尾辞として名詞を修飾する表現を形成しており、その点で位格名詞句などに付される**-ki**の場合と同じ働きをしていると言える。これに対し後の時代の(2)(3)などでは、⁸主要部名詞が所有接尾辞を伴うことにより、属格名詞句による限定表現(所有構造)と並行する構造となっている。特に(3)において、*ħusn bāg-iŋiŋ*「美の庭園の」における属格接尾辞と、*laṭāfat jöybār-iŋiŋ-ki*「優美さの小川の」における属格接尾辞+**-ki**とが意味的に異なる働きをしていたとは文脈上考えにくい。このような接尾辞**-ki**は本来の機能を失い、韻文作品において韻律を整えるためだけに用いられるようになった。そのためこの用法は定着することなく消失したものと推定される。

⁶ 対格+**-ki**の例はこれらの文献中に見られない。ただし注7を参照。

⁷ この形はヘラート写本(1436年筆写、ウイグル文字)による。一方1367年以前に筆写されたカイロ写本(アラビア文字)の対応箇所では、文字の点が欠けているため読みが判然としないが、*mun-i-ki*と復元することも可能であり、その場合には対格+**-ki**の最も古い例ということになる。

⁸ ウイグル文字による頌詩は1436年筆写の写本で伝わる。『ダフナーマ』は14世紀後半から15世紀前半の成立と推定されている。